

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 福岡 愛子

本論文は、歴史的・社会的に大きな意味をもった中国の「文化大革命」〔以下「文革」と略記する〕を取り上げ、日本においてその影響を受けた人びとの文革認識の揺らぎを、当事者の語りのなかに現れるアイデンティティの変容に焦点をあてつつ分析した「翻身」の社会学である。「翻身」とは、マクロな要因によって思想や態度の転換が迫られる問題的状况であると同時に、そうした状況のなかでの主体の再構築をも包含する概念である。こうした研究は日本でも中国でもほとんど行われておらず、その意味でも画期的な文革研究といえよう。文革は、その実態に関する情報が不十分ななかで、少なからぬ日本の知識人・学生・労働者の期待を集めたが、後に理念とは異なる事実経過が明らかになり、ついには中国当局の公的言説において全否定された歴史事象として、「翻身」研究に戦略的な特異性をもつ。福岡は、文革期の日中関係に思想・運動を通じてコミットした24名を対象として、当時の論考・著作、回想の収集と分析、また可能な当事者に対してのインタビューを行った。ピーター・バーガーの「態度変更 alternation」を土台に、宗教社会学の conversion や epiphany、日本思想史での「転向」の概念などを検討しつつ、語りのなかの主体性、相互作用の重視、情報の階層性、時間軸の導入を特徴とする、独自の「翻身」概念を理論枠組みとして設定している。

第2章では日本における文革認識の変遷について、その時代の新聞・雑誌の記事分析から整理し、日中関係の構造変動という語りの文脈を明らかにしている。そのうえで、第3章から第8章の丹念な資料分析は、戦前の左翼運動を経験した明治・大正生まれの第1世代、軍国少年・少女で戦後民主主義を経験した昭和初期生まれの第2世代、戦後生まれの第3世代という世代に関わる区分と、「政治としての文革認識」「革命・思想としての文革認識」「運動としての文革認識」という位相に関わる分類とを組み合わせながら、日中友好の政治家や北京特派員のジャーナリスト、毛沢東思想研究者や留学生、さらに日中交流推進事業に関与した人びと、60年代学生運動参加者といった、多様な立場と状況に置かれた当事者の記憶と語りのなかの文革認識の動きを分析し、累積的／再体験的／連鎖的等々の「翻身」の類型化的な把握を試みている。

福岡が結論で展望しているように、かつての自分の認識の誤りを正すという「反省」の語りより、否定された自己を回復し「個人誌」上に統合する新たな主体化の語りが顕著であるという事実の向こうには、人間が引きうけるべき「責任」に関わる、さらに大きな社会的な問いが潜んでおり、その更なる追求は今後の課題でもあろう。文革認識に焦点をしばったこのケーススタディは、その記述の厚みと分析の丹念さにおいて、アイデンティティ研究および「転向」研究の優れた貢献である。本審査委員会は、博士(社会学)の学位を授与するにふさわしいものと判断した。